

研究報告書

1. 研究テーマ

看護系教育機関における東日本大震災時による経験と防災対策・支援の検討

2. 研究組織

研究代表者：内木 美恵（日本赤十字看護大学 講師）

共同研究者：守田美奈子（日本赤十字看護大学 教授）

森岡 薫（石巻赤十字看護専門学校 副学校長）

田村 由美（日本赤十字看護大学 教授）

西田 朋子（日本赤十字看護大学 准教授）

亀井 縁（日本赤十字看護大学 講師）

殿城 友紀（日本赤十字看護大学 助教）

3. 要旨

2011 年に発生した東日本大震災は日本に未曾有の被害をもたらした学校防災の在り方についても重要な課題を残した。中央防災会議委員の河田氏は、各省庁が実施すべき取組課題のひとつとして小中高等教育に必要な防災教育を提示し、防災の訓練や知識を次世代に繋げるために防災の要素を入れて多角的に防災を学ぶことを提案している（2013.8.30, 朝日新聞）。防災教育は、看護系の高等教育機関に関しても検討していく必要があり、災害発生時に地域や病院との連携、通常の教育活動への再開、学生への心身のフォロー等の課題を、平常時からの検討が重要である。そこで、東日本大震災の被災地に在る看護系の教育機関での被災後の状況を明らかにし、防災教育の在り方及び課題を検討したいと考えた。平成 26 年度は、看護系教員の経験に焦点を当てて研究を実施した。

平成 27 年度は、研究の第 2 段階として、看護学生に焦点を当て、東日本大震災における経験を探求したいと考え研究を行った。

4. キーワード

看護系教育機関、学校防災、東日本大震災、避難所、救護活動

5. 研究報告

（1）研究の背景・目的

東日本大震災の発生直後から教育活動が復興していく経過を通して、看護学生は、どのようにその状況を捉え行動したのか、またその後、どのような経験をしたのか等、看護学生の体験を明らかにする。

（2）研究方法

<研究デザイン>

東日本大震災当時の学生の経験を分析するためには、震災発生時以降の状況における当事者の体験を詳細に記述し解釈することが必要となる。そのため、半構成的インタビュー

法を用い、記述に基づく質的研究である。

<研究参加者>

東日本大震災時(2011年)に看護学生であった看護職4名であった。震災当時に看護学生1年から3年生(4年生)であった看護職は、その後4年経過し、2015年現在で臨床経験1年目から4年目となっている。ゆえに、東日本大震災を看護学生として経験した臨床経験1年目から4年目の看護職と対象とした。また、災害時の体験に関して語ることができる安定した心身の状態にある人が参加者の条件とした。

<調査場所>

東日本大震災による被害を受けた看護系教育機関(専門学校、短期大学、看護系大学)

<調査期間>

平成27年6月～平成28年3月

<データ収集>

災害発生時に看護学生であった看護職の経験を分析するためには、災害発生時の文脈との関連で、その出来事をどのように意味づけたかに焦点をあてながら詳細なデータを収集する必要がある。そこでインタビューガイドに沿って、時間を設けて半構成的インタビューを行った。研究参加者との信頼関係を築きつつ、プライバシーに配慮しながら、インタビューの時間や場所を設定し、上記のことについて50分程度のインタビューを行った。その際、研究参加者の心理状態や疲労などに配慮して、負担のかからないように注意した。

インタビューでは、震災発生時から今日に至るまでの間で記憶に残っていることやその意味づけ、また体験を通して教育機関や教員に要望することなどについて、半構成的なインタビューを行った。なお、震災時の体験を思い出すことで参加者の心理的ストレスが増加されることも予測されるため、インタビューが負担になる状況が予測される場合は、一旦インタビューを中断するなど研究参加者への十分な配慮を行った。

インタビューによる心身の負担が懸念される場合は、医療機関の管理者と連携をとり、

その後のフォローを依頼することとした。

<分析方法>

分析は以下の手順で行う。①逐語録におこした、当事者の体験に関するインタビューデータを深く読み込んだ。②震災発生時から今日に至るまでの事象とその意味付けについて、その時の迷いや感情等も含めて、時間経過に即して一人ずつ分析した。③その上で事例毎に、震災時の体験に関する理解を深め、当事者の価値や関心との関連で、個別にその特徴的な文脈を視点に分析し、個々の体験として再構成した。④それらに基づいて、震災時に教育現場で何が起きたか、学生の視点から、その時の判断や行動の特徴、学生支援に関して必要な課題や対応について表すため、特徴的な内容や類似している内容を比較検討しながら分類し、テーマを抽出した。テーマを再度、文脈と照らし合わせながら、時系列に並べて大テーマを抽出し、フェーズに分けた。記述に当たっては、大テーマを【】、テーマを

<>で表した。

<倫理的配慮>

日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会および関連施設の倫理審査を経て実施した。本研究は、東日本大震災時に看護学生であった看護職に体験を語ってもらうという方法をとった。そのため、過去や現在での苦痛を語ることによって辛い体験を再体験する可能性がある。過去を語り、振り返ることに伴う研究対象者の負担に十分配慮して研究を行う必要があった。それを防ぐために、まず語ることが自己の浄化や再生に向えるような対話的インタビューを行うよう心掛け、もし、心的負担が懸念される場合、あるいは語った後で、心的ストレスが起こった場合は、フォローを受けられるよう連携体制を整えた。

(3) 結果

a. 属性

対象者は4名の看護師であり、男性2名、女性2名であった。震災発生時の学年は1年生が3名、2年生が1名であった。対象者へのインタビューは1回行い、時間は60～80分であった(表1)。

表1. 対象者の背景

	性別	発災当時の学年	インタビュー時の状況		
			看護師経験年数	年齢	結婚の有無
Sさん	男性	1年	3年	24歳	なし
Mさん	男性	1年	3年	24歳	あり
Cさん	女性	2年	4年	25歳	なし
Aさん	女性	1年	3年	24歳	なし

b. 災発当時に看護学生だった看護師の体験

災発当時に看護学生だった看護師の語りは、ほぼ時間軸に沿っていたが、それぞれの体験の深さとその時期はさまざまであった。災発当時に看護学生だった看護師の体験は、3つのフェーズで分けられ、第1フェーズは【校庭に移動して小学校へ避難】、第2フェーズは【小学校でのサバイバル生活】、第3フェーズは【自宅に戻ってから学校再開までの生活】であった(表2)。

表 2. 災発当時に看護学生だった看護師の体験

フェーズ	大テーマ	テーマ	
第 1 フェーズ	校庭に移動して小学校へ避難	1	普通の訓練と同じようにすぐ終わると思い、教室から校庭に移動して整列する
		2	隣のビルの上から逃げろーという声や逃げていく人が目に入る
		3	自分たちは整列していたら先生たちが話し合っただけ避難の場所を決め一斉に走り出す
		4	避難途中にお年寄りに手を貸しながら一緒に小学校へ逃げる
		5	小学校にたどり着き、波に人が乗っている車等が目に入るが助けられない
第 2 フェーズ	小学校でのサバイバル生活	6	先生とともに自分達は避難者の濡れた体を拭等できる援助をはじめる
		7	夜間の暗闇に恐怖を感じながらも仲間と居ることで安心する
		8	自分達がやらなくてはならないという気持ちで援助活動を行う
		9	情報が少なく連絡もとれず、寒さと食べものがない中で助け合いながら津波の水が引くのを待つ
		10	先生は救護をし、自分達のヒーローである
		11	家族のことが心配で連絡をとる
		12	家族や知人が迎えに来て自宅に帰る
第 3 フェーズ	自宅に戻ってから学校再開までの生活	13	いつもの生活環境が一変し不便な中でボランティア活動に参加する
		14	授業再開を案じながら教員からの安否確認の連絡で学校の様子を聞く
		15	近隣大学に間借りし授業が再開され、みんなに会え、日常に近づけることが嬉しい
		16	学校での行われた心のケアが辛い気持ちを癒してくれる

第 1 フェーズ：【校庭に移動して小学校へ避難】

＜普通の訓練と同じようにすぐ終わると思い、教室から校庭に移動して整列する＞

「ま、いつもの地震かなって感じだったんで…(中略)…また、どうせ授業を再開するんだろなって軽い気持ちだったんです(A さん)」と、これまの地震が来たとき同様

に考えており、「教室からグラウンドに出て整列して、揺れが収まったので、ホッとしていた(Cさん)」と、いつもの避難行動をとっていた。

＜隣のビルの上から“逃げろー”という声がする＞

学生は整列したまま、学生同士で授業の話をしたり、この後どうするかとかしをしていた者や、男子の学生は先生について行って倉庫からテントとか出していた。その時、「たまたま、学校の近くの工事現場の方がひしに私達に津波が来ることを教えてくれて、逃げなさいって(Sさん)」という声が聞こえ、整列したまま学生どうして話していると「その建物の上に居たおじさんたちが“何やってんだ。早く逃げろ”って、大きい声で言われて(Aさん)」津波が来るんだということを知った。

＜自分達は整列して待っていると先生達が話し合って避難の場所を決め一斉に走り出す＞

「なんか先生たち、それ、山に、近くに山があったので、山に逃げるか、小学校に逃げるか、どうするかって言ってた(Aさん)」そして、「何処に避難するのが一番いいか、私たち学生は全くわからなかったの、先生達が、まあ1時間くらい話し合って避難先を決め(Sさん)」、学生と先生が一斉に歩けば5分くらいのところにある小学校に向かって走り始めた。「学校の先生が避難するとき、的確な指示をくれた(Aさん)」ことにより、津波にのまれることなく避難ができた。

＜避難途中にお年寄りに手を貸しながら一緒に逃げる＞

「(逃げる時は)我が身一つ、上着だけ。正直、貴重品があったからってあの当時役に立ちませんからね(Mさん)」と逃げることに無我夢中であった。避難の途中、「友達と手つないで、こう走ってて、なんか近くに近所のおばあさんだかが居て、“もう私、いいから”とかって言ってたんですけど、男子学生おぶって、小学校まで連れってあげた(Aさん)」と、若者のように早く走ることのできない高齢者を助けながら一緒に逃げた。

＜小学校にたどり着き、波に浮かぶ車に人が乗っている様子が目に入るが助けられない＞

「小学校の1階に逃げ込んだ、2回に続く階段に続いて逃げたが、階段を2-3段上がったところで1階に入るところの扉が津波で壊されていくのが見えた(Sさん)」と、危機一髪で逃げ延びていた。「(小学校の屋上に)上に行って、ああ、水がこんなに来てるんだって。もう全部、家も車も木も何もかもブワッと、ほんとに流れてる感じだったので、そのときに、私は「あ、ほんとに、これは一大事なんだな(Aさん)」と、これまで半信半疑だったのが、「帰れないなって(Aさん)」、津波を目にして感じた。「水に浮いた車には、人や犬が乗っていたけど、自分にはどうしようもできないっていうきもちになって…(Cさん)」ただ茫然と見ているしかなかった。

第2フェーズ：【小学校でのサバイバル生活】

＜先生とともに自分達は避難者の濡れた体を拭く等できる援助をはじめる＞

「先生が避難してきた住民の代表者と話し合いをいろいろしているようだった(Sさん)」。「何でだか分かんないんですけど、皆でちゃんとやろって言うか、他にも、けがしてる

人も居ましたし、流されて、こう来る人も居たので、やらなきゃいけないという感じで。先輩を中心に、どういうふうにやろうとかか話し合ったり、ローテーションを先生と先輩を中心になりながらやって(Aさん)」、小学校に逃げてきている人達の支援を始めた。学生は、「何もできないけど濡れた身体を拭いた(Cさん)」、また「先生から指示をもらったり、女性の方がつきっきりで、認知症のおじいちゃんの相手をしたりだとか、パーキンソンのおじいさんのトイレ介助をした(Mさん)」。夜になり、停電で真っ暗闇だったので「携帯電話の明かりを頼りに(Sさん)」学生はグループを作り、休みを取りながら高齢者や等の介護や見回りを行った。

<夜間の暗闇に恐怖を感じながらも仲間と居ることで安心する>

この夜は、「すごいふぶいていた日で、あたりがすごく視界が悪くて真っ暗になってしまった。寒くて、怖くて眠れなかった(Sさん)」が、「皆いれば、まあ安心かなって、そういうわずかな希望にすがって(Aさん)」夜が明けるのを待った。

<自分たちがやらなくてはならないという気持ちで避難者の援助活動を行う>

「何かがこう、私たちを動かしていたのかはわからないけど、自分たちがやらなくちゃいけないという部分ももちろんあって(Sさん)」介護などを行った。「おトイレに行けない人のお手伝いだったりとか。自己導尿をしてる人も居たので、毛布で隠してやってもらったりとか。あとは、ちっちゃい子とかも居たので、その子たちと少し話したりとか(Aさん)」行った。しかし、「詰まったトイレの掃除は、さすがにきつかった(Sさん)」けど、2日間、このような活動をつづけた。

<情報が少なく連絡もとれず、寒さと食べものがない中で助け合いながら津波の水が引くの待つ>

「具合の悪くなる学生もいたし、食べるものがなく、バックの中に入っていたチョコレートなどを皆で分けて食べた(Cさん)」。「携帯電話も県外、道路も寸断で、助けを呼びに行くこともできない。連絡がとれない状態(Sさん)」で、「ラジオを持ってくる近所の人も居て、ラジオでどこどこ地区は壊滅的だとかという話をされていて(Aさん)」、気分が落ち込むこともあった。自分たちのいる地域の情報が分からず、「水が引いて、早く外の状態を見に行きたいというか、知りたい(Sさん)」と思っていた。

<先生は救護をしており、自分達のヒーローに見える>

「実習の場面も(教員が患者に看護しているところを)見てなかったのも、あの時、“ああ、先生たち看護師はすごい(Aさん)」し、「先生達、看護師はこの場でとても必要とされており、倒れたら大変なことになると思った。たくさんの人を助けてて、先生はヒーローだった(Sさん)」と感じていた。

<家族のことが心配で連絡をとる>

少し落ち着くと、「家族、大丈夫かなってという話(Aさん)」しが出てきて、「皆、家族のことを考え(Aさん)」、心配していた。「小学校についた時は、家族と連絡が取れたけど、

翌日には電波が届かなくなった。友人が迎えに来る同級生がいたのでその友達に、お母さんとか親に、自分が元気だということを伝えてほしいと頼み(Cさん)」、家族へ自分が無事であることを伝えたかった。

＜家族や知人が迎えに来て自宅に帰る＞

津波が引いて、道が通れるようになり、携帯電話がつながっていた小学校避難時に家族や知人に無事であることを連絡していたので、親達が迎えに来た。「最初、先生たちはちゃんと親御さんに、こう引き渡したほうがいいって思ったんですけど、それだと、なかなか、やっぱ帰れないって子も出てきたので。だ、近くの地域の人(学生を迎えに来た親の車に)一緒に乗って帰った(Aさん)」。「私は友達のお母さんの車で帰ったら、すれ違いで母親が迎えに来ていた(Cさん)」。

第3フェーズ：【自宅に戻ってから学校再開までの生活】

＜いつもの生活環境が一変し不便な中でボランティア活動に参加する＞

自宅に帰ると、「(私の実家は)津波の影響が一番大きかったので、周りの、風景だとか、いつもの通学路っていうか、風景が全くなくなってしまう、生活環境が一変してしまった(Sさん)」様子が目に入ってきた。だけど、「自分の知る街に戻ってもらいたいなというのがありまして(Sさん)」、瓦礫を片づけたりなど「ボランティアをやった(S,Cさん)」。

＜授業再開を案じながら教員からの安否確認の連絡で学校の様子を聞く＞

「先生からおうちのほうは大丈夫ですか？とか今の生活どう？って電話来て。で、何回かこう連絡来て、学校は一応、6月あたり目安に開催するように、今、準備してたからとか、あと教科書、何がない？とか(Aさん)」、「無事なのかということと、あとはそっちの状況はどうなのか、どうなんだという状況か(Mさん)」など、教員とこまめに連絡をやり取りした。

＜近隣大学に間借りし授業が再開され、みんなに会え、日常に近づけることが嬉しい＞

発災から2ヶ月程経過し、学校が再開した。学校は津波で破壊された校舎は使えず、近くの大学の校舎であった。「今まで使っていたところが全く使えない、全く知らない環境下で勉強を再開しなくちゃならなかったから、初めは大丈夫かなって思った(Sさん)」が、「学校が始まったときに、先生たちが入り口で出迎えてくれてて、“ああ、元気だったの？”みたいな、“どうだった？”って聞いてくれた。皆も“ああ、元気だね”ってなって。もう、ただただ、なんか学校は、あんまり授業をするのは好きじゃないですけど、みんなに会えたっていうか、今こうやって集まれたことが、すごい最初はうれしかった(Aさん)」。

学校が始まり、小学校でのサバイバル生活までは、同じ体験だったけど、自宅に戻ってからは、それぞれが違う体験をしていたが、再開できたことを、学業が続けられることで日常の生活を取り戻していった。

<学校での行われた心のケアが辛い気持ちを癒してくれる>

講義が始まり、演習や実習も行った。通常の講義のほかに、「2カ月に1回くらいのペースで心理士さんが来てくれて、カウンセリングをしてくれた。これって、大事だった(Mさん)」。「震災後まもなくはPTSDになっていて、夢にも出てきて、周りの友人や学校の先生に相談したり、臨床心理士の方が学校に来てくれて話を聞いてもらった(Sさん)」。「心のケアを1年くらいしてもらったおかげで「今、こうして、いろんなことを話せる容易になったし、前向きに考えることができるようになった(Sさん)」」。通常の学業と平行して心のケアを受けることで、心理的に安定感を取り戻していった。

(4) 考察

a. 学生にとって教員の存在

避難や小学校でのサバイバル生活、学業が再開するにあたり、学生にとって看護教員は学生を導く役割があった。

地震の直後、学生は<普通の訓練と同じようにすぐ終わると思ひ、教室から校庭に移動して整列>していた。学生は自分たちで津波を予測して避難を決めることはなかった。<自分たちは整列していたら先生たちが話し合っ避難の場所を決め一斉に走り出す>こととなり、避難を決断したのは、教員であった。避難に当たっては教員が主導し(田端, 2013)、学生が自分自身で避難を判断したり、動き出すことはない。看護学生達も、教員の判断を待っていたと考えられる。よって、学生にとって教員は避難を判断をしてくれる者を考えていたと言える。しかし、予想を大幅に超える甚大な災害が起こることが東日本大震災からの学びであり、今後の避難においては、教員が避難を判断するという考え方だけを訓練するだけではなく、学生が自分で判断し、身を守る訓練も必要であると考え。

また、避難した小学校において学生にとって教員は、究極の状況の中で生きるために、何をすべきかを示す役割であったと考える。<先生とともに自分達学生は避難者の濡れた体を拭等できる援助をはじめ>、避難所で、教員は看護学生達ができることとして介護や高齢者の介助であることを明示し、学生たちに介護等を実施させることで、学生のこの避難所での役割を示した。これにより、学生は、寒さや恐怖におびえ、食べるものもない中で、生きようという気持ちを維持させたのだと考える。広瀬(2004, pp. 179-187)は、生命の危機がさしせまるようなサバイバル生活で生き抜くために、避難者の中での暗黙の救済者の指名があり、そこでの援助行動が重要であると述べている。看護学生達にとって援助行動は介護等であり、教員の助言が必要であった。

その他に、教員は学生が学業に戻ることを支える役割があったと考える。学生は<授業再開を案じながら教員からの安否確認の連絡で学校の様子を聞>いており、この教員の学生への連絡が、学業への継続意識を持続させたと考える。阪神淡路大震災においても、看護学生と看護教員はこまめな連絡をしており(南, 1999)、学生の学業への継続意識を持たせるために必要な役割であると考え。

b. サバイバル生活を支えたもの

この日は、小雪が舞う、寒い日であり、小学校に避難後、小学校 2 階あたりまで津波で水につかっていた。また、停電し、食べ物はなく、多くの周辺住民が避難してくる状況であった。学生は、命を守ることはできたが、夜に向かってサバイバル生活をする事となった。学生は、＜夜間の暗闇に恐怖を感じながらも仲間と居ることで安心＞したこと、顔見知りや友人と一緒にいられたことで、苦しい気持ちを話したり、少量でも食べ物を分け合ったり等、相互に依存試合助け合いながら過ごせる仲間がいたことがあったと考えられる。災害の衝撃の直後には危機的状況を乗りきった喜びを同じ体験をしたもの同士で分かち合い、お互いの助け合いが活性化し、生きる意欲となると言われる（広瀬, 2004, pp40-43）。この時期に、学生が仲間といることで、他者の考えを知ったり、自分の思いを話すことで、緊張がほぐされた。集団で同じ避難所にいたこと、介護ケアをグループで行うなど、お互い支えあえたと考える。

また、家族との連絡も重要である。途中で電話の電源が切れてしまうこともあったが、小学校から自宅に戻る友人に連絡を託すなど学生間で協力し合って、それぞれの家族に安否を伝えていた。災害時家族の存在は、心理的な大きな支えになることが言われている（Raphael, 1986/1989）。学生にとっても家族と連絡が取れ続けていたことが、安心につながっていたと考えられる。しかしながら、停電の中で携帯電話の充電が切れたことから、電源のある間に家族や大切にしている人に自分が無事である連絡を入れることを指示したり、訓練することも今後必要となると考える。

加えて、教員の救護活動を行う姿を目にすることで、＜先生は救護をし、自分達のヒーローである＞と感じていた。教員たちが負傷者を救護しケアする姿は、これまで実習でも見ることはなかったが、医療や看護の敷材が無い小学校という中で、他の避難者が看護教員を看護師として必要とされながら活動を知ることとなった。このことで、学生たちは同じ学校という所属であることで誇らしく思いながら、頼もしく感じ、看護教員が救護等を行う様子で励まされていたと思われる。

以上から、学生が生きる意欲を持ち続けサバイバル生活を支えたものは、同級生の存在と助け合い、家族との連絡、看護教員の救援活動を目にすること、自分達が介護等の活動をしたことである。

c. 学生にとって心のケア

自宅に帰ったから学校が再開するまでの間＜授業再開を案じながら教員からの安否確認の連絡で学校の様子を聞く＞など、教員は小学校でのサバイバル生活の後も、学生に定期的連絡を取った。学校が始めてからは、＜学校での行われた心のケアが辛い気持ちを癒した＞。学生にとって、自宅に戻って連絡を取り合うことから、教員に自分の思いを話す機会になっていたと推測され、心のケアが始めていたと考えられる。その後は、学校で臨床心理士を交えながら心のケアを続けていた。このような自宅に戻って直ぐか切れ目の

ない心のケアを行うことで、学生達の心は徐々に癒されたと考える。

学校が再開してから始めるのではなく、できるだけ早期に学生の心のケアを始めることが必要であり、切れ目のないケアにより効果が上がると言える。しかし、教員も被災者であることから、教員の心のケアを同時に行いながら、学生への関りが重要であると考ええる。

(5) 結論

看護学生は、教員の指示により逃げ始め、自分たちの判断で、高齢者などに手を貸しながら避難場所にたどり着いていた。避難場所では、他の避難者とともに津波が引くまで、サバイバル生活をしており、教員の誘導と、自分達の意味で避難者の援助活動を行った。学校再開までの間は教員の連絡で学校の情報を取り再開を待っていた。発災から学校再開において、教員の判断、指示、関わりが学生の避難、サバイバル生活、災害による心的外傷には必要であることが示唆された。

(6) 謝辞

本研究に参加してくださった看護師の皆様は心より感謝いたします。加えて、研究参加者である看護師の皆様のご参加にご協力をくださいました所属施設の皆さまに感謝いたします。

本研究は、平成 27 年度「学校法人日本赤十字学園赤十字と看護・介護に関する研究助成」の資金により実施いたしました。

(7) 引用文献

南裕子(1999). 阪神・淡路大震災そのとき看護は. 日本看護協会出版会, 142-147.

広瀬弘忠 (2004) . 人はなぜ逃げおくれるのか—災害の心理学. 集英社新書

Raphael, B. (1986)/石丸正(1989). 災害の襲うとき—カタストロフィの精神医学. みすず書房, pp140-147.

田端健人 (2013). 学校を災害が襲うとき: 教師たちの 3.11. 春秋社, 17-36.